

シリーズ「キリストの花嫁」No.2

ブライダル・パラダイム

(1)

【聖書箇所】 詩篇 27 篇 4 節

ベレーシート

●前回から、「キリストの花嫁」というシリーズを始めました。今回、「ブライダル・パラダイム」とタイトルをつけさせていただきましたが、「ブライダル・パラダイム」ということばの意味は、**神と人とのかかわりを「花嫁と花嫁」という視点で見る見方**のことです。聖書においては、キリストと教会のかかわりが、以下のようにいろいろな比喻で表現されています。

- ①キリストのからだなる教会・キリストを頭とし、教会をそのからだとする。調和と一致のイメージ。
- ②神の民としての教会・・・キリストを王とし、教会をその民とする。統治形態のイメージ。
- ③神の宮(建物)としての教会・キリストを建物の土台、あるいはと要石とし、教会はその土台の上に建てられる。
- ④新しい聖なる都エルサレム・神と人とは永遠に共に住む場としての都。回復されたエデンの園のイメージ。
- ⑤キリストの花嫁なる教会・・・キリストを花嫁とし、教会はその花嫁としてやがて一つになる。結婚のイメージ。

●神と人とのかかわりを「花嫁と花嫁」という視点から見ると「ブライダル・パラダイム」は、今日の教会において最も欠落しています。「ブライダル・パラダイム」における**花嫁の霊性**は、奉仕とか働きというよりも、神を知ること、神を愛することを喜びとし、そのことを何よりも大切にされた世界です。つまり、「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして主なる神を愛する」という第一戒に生きる世界です。それは主のために仕えることを第一義とするマルタではなく、主の前にすわって主の語られることばを聞くという**マリヤの霊性**です。あるいは、「私は一つのことを主に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、主の家に住むことを。主の麗しさを仰ぎ見、その宮で思いにふける、そのために。」と歌った**ダビデの霊性**なのです。ダビデの霊性も、マリヤの霊性も、みな「花嫁の霊性」につながっているのです。それをより強く意識するために、「ブライダル・パラダイム転換」ということばを使いたいと思います。実は、このことは当教会がこれまでずっと目指してきた霊性なのです。日々の「サムエル・ミニストリー」も、ヘブル的視点から聖書を読み直して「御国の福音」を余すところなく論証していくことも、「ヘブル・ミドゥラーシュ」もすべて、「ブライダル・パラダイム転換」の取り組みなのです。これを、「アウトプット志向からインプット志向への転換」という言い方もできます。

●今年の秋(9/27~10/4)に初めてもたれる「セレブレイト・スッコート」の祝祭の基調となる概念は「花嫁の霊性」であり、「ブライダル・パラダイムの確立」を目指す取り組みなのです。「花嫁なる方を心から愛し、その花嫁が迎えるのをひたすら待ち望む花嫁」の霊性は、神に愛される喜び、神を愛する喜びとして私たちの心を掻き立てることと信じます。そのためにも、花嫁のピクチャーを通して、そこから多くのインスピレーションを与えられたいと願っています。「キリストの花嫁」というタイトルの歌をこれから毎日のように歌っていきます。これは「セレブレイ

ト・スツコート」のテーマ曲です。歌詞をここに掲載しておきますので、この歌詞を瞑想のテキストとして用いてください。この歌詞はキリストの花嫁の姿を実に端的に表わしていると思います。また、メロディもすばらしいです。

私の愛する方 何と美しく慕わしい
この身も この心も すべてあなたのもの
花嫁は待っています 花婿が来られるのを
いつの日か顔と顔を合わせ みそばに行く日まで
あなたを愛しています あなたのすべてが愛(いと)しい
心尽くし 御霊も花嫁も待ち望む
来てください 来てください 花婿イエシュアよ

●天におられる花婿なるキリストの姿をさらに深く知るために、この歌詞をもとに「キリストの花嫁」をシリーズとして取り上げていきたいと思えます。

1. 花婿に愛され、喜ばれていることを知る花嫁

●歌詞の中に「私の愛する方」という表現があります。これと全く同じ表現が聖書の中に繰り返し出てくる書があります。それは「雅歌」です。なんと20回も、です。その中のひとつである1章16節には、「私の愛する方。あなたはなんと美しく、慕わしい方でしょう。」とあります。「キリストの花嫁」の賛美の第一行目にあるフレーズと同じです。つまりこの歌は、「雅歌」に記されている花嫁の愛の告白なのです。

●今、「サムエル・ミニストリー」では「ゼパニヤ書」を瞑想していますが、その次は旧約聖書の最後の書である「マラキ書」です。その後に「雅歌」を取り上げてじっくりと瞑想して行く予定です。おそらく、「雅歌」はそれほど真剣に読まれる書ではないと思えます。しかし、そこに描かれているのは単なる男と女の愛の歌ではなく、花婿と花嫁の愛の歌なのです。この「雅歌」を味わっていくときにも「ブライダル・パラダイム」が必要です。それによって多くのことが啓示されると今から期待していますが、「雅歌」の「私の愛する方」という表現の中から四か所をピックアップしてみたいと思えます。

【新改訳改訂第3版】雅歌

1:16 私の愛する方。あなたはなんと美しく、慕わしい方でしょう。

2:10 私の愛する方は、私に語りかけて言われます。「わが愛する者、美しいひとよ。さあ、立って、出ておいで。」

2:16 私の愛する方は私のもの。私はあの方のもの。

7:10 私は、私の愛する方のも。あの方は私を恋い慕う。

●特に、2章10節の「私の愛する方は、私に語りかけて言われます。『わが愛する者、美しいひとよ。さあ、立って、出ておいで。』」という表現は重要です。なぜなら、花嫁が花嫁としてのアイデンティティをしっかりと持ち、それを保つためには、自分が「愛されている存在」だという意識がきわめて重要だからです。すべてはこの意識からは

じまるのです。もし自分が愛されているという意識が希薄であれば、神を愛する喜びも希薄となってしまいます。

●パトモス島に島流しにされた使徒ヨハネは、そこでひとり、神を礼拝していた時に天が開かれて天上の光景を見た人です。そのヨハネがそのことを「ヨハネの黙示録」に記しているのですが、4章10節に、24人の長老が御座に着いている方の御前にひれ伏して、永遠に生きておられる方を拝み、自分の冠(殉教によって与えられた冠)を御前に投げ出して次のように言っているのを見、そして聞きました。

「主よ。我らの神よ。あなたは、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。」(黙示録4:10)

●「あなたのみこころゆえに」とは、「あなたの目的にかなって」とか、「あなたの喜びのままに」とも訳せることばです。ヘブル語では「みこころ」に「ラーツォーン」(רָצוֹן)という語彙を当てています。この「ラーツォーン」という語彙は「神から喜びをもって受け入れられている」こと、いわば「神のお気に入り」を意味するのです。ましてや、「キリストの花嫁」は花婿の喜びの対象であることは言うまでもありません。すべての被造物は「はなはだ良かった」という神の創造の感動の下に存在しているのですが、「キリストの花嫁」は神の満足される、お望みどおりの実に美しい存在なのです。この信仰こそ、「キリストの花嫁」のアイデンティティの根を太いものにしていきます。そしてこのアイデンティティは、神とのかかわりにおいてさらなる成熟への憧憬(あこがれ)を抱かせるのです。

●使徒パウロという人は、キリストを知ってから次のように述べています。

「かつては人間的な標準でキリストを知っていましたが、今はもうそのような知り方はしません。だれでもキリストのうちに
あるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」(IIコリント5:17)

●キリストにあって、自分は神のみこころにかなった、喜びの対象なのだという認識が与えられたときに、パウロという人の真の美しさが輝き出るようになったのです。これが「新しく造られた者」の姿なのです。キリストなしには、人はやみの中にあるようなものであり、神が本来意図された輝きを放っていないのです。神のキリストによる救いの目的は、神が「はなはだ良かった」とする存在へと回復させるためでした。回復させるだけでなく、その全生涯において、神の「トーヴ」(טוֹב)が追いかけて来るのです。

●ダビデもそのことを確信していました。ですから、「まことに、私のいのちの日の限り(全生涯)、**いつくしみ**(「トーヴ」(טוֹב))と**恵み**(「ヘセド」(חֶסֶד)=不変の愛)が、私を追って来る」(詩篇23:6)と告白できたのです。ダビデの輝きの生涯はまさにその確信から来ているのです。

●「キリストの花嫁」である私たちはこの確信が、キリストの御霊の助けによって与えられるのです。雅歌2章10節の「私の愛する方は、私に語りかけて言われます。『わが愛する者、美しいひとよ。さあ、立って、出ておいで。』」という花婿の声は、御霊の助けによってはじめて聞き取ることができるのです。御霊の働きは花婿の声を花嫁に聞かせることで、花嫁をより美しく輝かす力を与えます。ここでの力は何かの働きをさせる力ではなく、愛されていると

確信させる力です。その愛の力によって、「私は、私の愛する方のもの。あなた方は私を恋慕う」(雅歌 7:10)という
かかわりを告白することができるのです。

【新改訳改訂第3版】雅歌 8章 6~7節

- 8:6 私を封印のようにあなたの心臓の上に、封印のようにあなたの腕につけてください。愛は死のように強く、
ねたみはよみのように激しいからです。その炎は火の炎、すさまじい炎です。
- 8:7 大水もその愛を消すことができません。洪水も押し流すことができません。もし、人が愛を得ようとして、
自分の財産をことごとく与えても、ただのさげすみしか得られません。

●ここには「愛の力」のすさまじさが語られています。花婿なる主は、私たちに対する燃えるような愛を心に抱いて
おられるという事です。大水もその愛を消すことができないのです。御父が御子に永遠の愛を共にする結婚のパート
ナーを与えるために、人としてこの世に遣わされました。この世での御子イエシュアの十字架の死は、私たちに対す
る「驚くべき求愛行為」でした。御子イエシュアの十字架の上で流された血潮(血の杯)を受け取った者はみな、花婿
としてのイエシュアの求愛行為を受け入れた花嫁となったのです。御霊は花婿の友人としての役割を担っています。
花婿の友人としての務めとは、花嫁候補の目を開いて、花婿のすさまじい愛に気づかせることです。

●「キリストの花嫁」という「ブライダル・パラダイム」に秘められた啓示は、神とのかかわりにおいて、「心を尽
くし、思いを尽くし、知力を尽くして主なる神(花婿)を愛する」という神の第一戒を回復させる力となると信じます。
それは、花嫁である教会に大きな変革をもたらす鍵となります。

2. 花婿の「麗しさ」を見出そうとする花嫁

【新改訳改訂第3版】詩篇 27篇 4節

- 私は一つのことを【主】に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、【主】の家に住むことを。
【主】の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。

●自分の生涯において最も優先すべきことが明確な人は、周囲の流れに流されないで歩むことができます。人はみな
自分の価値観で物事を考え、そして行動しています。ダビデは、主にあって最も大切な事柄を自分の人生の土台とし
て生きることができるように、まず主に願い、そしてそれを求めました。キリストの花婿の霊性のモデルであるダビ
デが願い求めた「ただ一つの願い」(One Thing)は、主の「麗しさ」を仰ぎ、それによって心が魅了されることでし
た。そのためにダビデは優先的にそのことを切に「求めた」のです。これこそ聖なる最高レベルの楽しみです。あ
る何か(人や事柄)に、心が奪われたり、驚きや感動を覚えたり、魅了されたりするということは決して悪いことでは
ありません。それは、神が本来人間の中に埋め込んだ「思い」(願いや欲求)なのだと思えます。しかし人間の罪はそ
うした思いを誤った方法で満たそうとします。神のうちにあるものではなく、この世におけるさまざまなものによっ
て満たそうとします。

●ところで、「麗しさ」と訳されたヘブル語は「ノアム」(נוֹאֵם)で、英語だと The beauty です。冠詞がついているのは「主の麗しさ」を意味しているからです。原文では「ノアム・アドナイ」(נוֹאֵם אֲדֹנָי)となっています。「ノアム」は聖書ではこの箇所が初出箇所です。聖書全体では6回しか使われていませんが、主の「麗しさ」が、他では「恵み」「慈愛」「喜び」「好意」「楽しさ」「親切」とも訳されています。ダビデは主のそのような面を見出すことができ、それによって心が満たされるように願ったのです。

●花嫁の務めは、花婿の「麗しさ」、あるいは「美しさ」を見出すことです。そしてそのことを何よりも喜びとすることです。そのためにはそれを求めなければなりません。なぜなら、求めなければ得られないからです。花嫁が花婿を慕い求めるということは、花婿の「麗しさ」を発見することなのです。

●このところ、サムエル・ミニストリーでは「ゼパニヤ書」を瞑想しています。その書はユダとエルサレムに対して「すべてのものを取り除く(一掃する)」という、とても厳しいさばきを語っています。なぜ、神がユダのエルサレムに住む人々に厳しいさばきをするのかその理由が記されています。それによれば、**主を尋ね求めず、主を求めない**からなのです。逆に言うならば、主を尋ね求めること、主を求めることが、神を喜ばせることだと分かります。実は、**主を「尋ね求める」「求める」ことこそが、花嫁の霊性**なのです。主はこの霊性をユダの民が回復することを求めておられるのです。偶像礼拝、混合宗教の危険性は決してなんとなく生ずるのではなく、花嫁の霊性を失う時に入り込んで来るのです。

●預言者ゼパニヤが活躍した時代には、ダビデのように「主を求める」者はいなかったことが強調されています。マナセ王とアモン王の57年間もの治世にわたって、神の民が自分たちの生存と防衛の保障を神に求めることなく、大国アッシリヤに求めていたのです。これは神の心を痛める行為でした。神の教えを記した「トラーラー」もしまい込まれ、神のみことばが聞かれない時代が続いたのです。つまり、神のいのちの通路を塞いでしまっていたのです。そのような状況の中で主は、もし「主を求める」ならば、激しい怒りから「かくまう」と約束されたのです。おそらく「主を求める」者たちが、バビロンの捕囚の地で神のトラーラーを回復させ、神を見出すに至ったと考えられます。

●「尋ね求める」と訳されたヘブル語は「ダーラシュ」(דָּרַשׁ)で、「求める」と訳されたヘブル語は「バーカシュ」(בָּקַשׁ)です。ここで、聖書における「渴望用語」を記してみたいと思います。それらはみな「**花嫁の霊性**」を表わす語彙として重要です。

(1) 「バーカシュ」(בָּקַשׁ)

●「バーカシュ」は「渴望用語」の中で最も多く使われている語彙(225回)ですが、とりわけ、心情的な面において求めるところに特徴があります。たとえば、「私は一つのことを主に願った。私はそれを求めている(בָּקַשׁ)。」

●新約に「神の国とその義とを、まず第一に求めなさい。」(マタイ6:33)とありますが、ここの「求める」をヘブル語にすると「バーカシュ」です。同じく「求めなさい。そうすれば与えられます。」(マタイ7:7)の「求める」も「バーカシュ」です。

(2) 「ダーラシュ」(דָּרַשׁ)

●「ダーラシュ」の使用頻度は165回です。「バーカシュ」が心情的であるのに対して、「ダーラシュ」は理性的で

す。つまり、神に尋ね求め、問いかけ、調べて、そこにある神の秘密を掘り起こすような求めです。詩篇 9 篇 10 節には「御名を知る者はあなたに抛り頼みます。【主】よ。あなたはあなたを**尋ね求める(שׁוֹרֵץ)**者をお見捨てになりませんでした。」とあります。すばらしい約束ではありませんか。שׁוֹרֵץ

●ちなみに、「ダーラシュ」(שׁוֹרֵץ)のギリシア語訳は「ゼーテオー」(ζητέω)です。「バーカシュ」のギリシア語訳は「エクゼーテオー」(ἐκζητέω)です。ギリシア語では「ゼーテオー」の使用頻度の方が「エクゼーテオー」のそれよりもまさっています。ヘブル語の使用頻度と逆です。

(3) 「シャーアル」(שׁוֹרֵץ)

●「シャーアル」は「尋ねる、願う、求める」という意味で、詩篇 27 篇 4 節の「私は一つのことを主に**願った**」で使われています。使用頻度は 183 回です。イスラエルの最初の王であったサウルは「シャーウル」(שׁוֹרֵץ)と書きます。その意味は「主に尋ね、主に求める」ということですが、サウルは自分の名前に啓示されていることを実現できませんでした。使徒パウロのヘブル名は「サウル」です。サウル王と同じベニヤミン族の出身で、しかも同じ綴りの名前「シャーウル」(שׁוֹרֵץ)です。使徒パウロは、最初は主に逆らっていましたが、後にはだれよりも主を尋ね求める人となり、神の奥義を啓示された人です。

(4) 「シャーアフ」(שׁוֹרֵץ)

●「シャーアフ」は「あえぐ、あえぎ求める、熱望する、切望する」という意味で、詩篇 119 篇 131 節の「私は口を大きくあけて、**あえぎました**。あなたの仰せを愛したからです。」で使われています。使用頻度は 14 回です。

●コロサイ人への手紙 3 章 1 節に「上にあるものを求めなさい。」とありますが、ここでの「求める」のヘブル語は「熱望する、切望する」という意味の「シャーアフ」が使われています。

(5) 「シャーハル」(שׁוֹרֵץ)

●「シャーハル」は、「真面目に、熱心に、本気で、神を求める(探し求める)」という意味です。使用頻度は 13 回。詩篇 63 篇 1 節の「神よ。あなたは私の神。私はあなたを**切に求めます**。水のない、砂漠の衰え果てた地で、私のたましいは、あなたに渴き、私の身も、あなたを慕って気を失うばかりです。」で使われています。また、箴言 8 章 17 節の「わたしを愛する者を、わたしは愛する。わたしを**熱心に探す**者は、わたしを見つける。」でも使われています。

(6) 「カーマー」(שׁוֹרֵץ)

●「カーマー」は「恋慕う、恋こがれる」という意味で、詩篇 63 篇 1 節の後半にある「水のない、砂漠の衰え果てた地で、私のたましいは、あなたに渴き、私の身も、あなたを**慕って気を失うばかり**です。」に使われています。使用頻度は 13 回です。

(7) 「アーラグ」(שׁוֹרֵץ)

●詩篇 42 篇 1 節に「鹿が谷川の流れを**慕いあえぐ**ように、神よ。私のたましいはあなたを**慕いあえぎます**。」とあります。その切望感と希求性は、神への強烈な渴きのゆえです。使用頻度は 3 回と少ないのですが、生ける神を求

める希求性の強い語彙と言えます。もし、この渴きの満たしを神以外のものに求めるとすれば、かかわりの危険度は増すことになるでしょう。

ベアハリート

●聖書における「渴望用語」は「ダビデの霊性」、「マリヤの霊性」であると同時に、「花婿を慕う花嫁の霊性」なのです。今日の教会は御霊の助けを通してこの霊性を回復し、自分たちのものとしなければなりません。なぜなら、この霊性は神の第一戒である「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」が実現することにつながるからです。

●終わりの時代(終末)には、より速度を増して、神の秘密が開かれてくる時代となります。なぜなら、神を慕い求める霊的な渴きの時代になるからです。ですから、私たちも神の秘密を「しつこく尋ね求める」花嫁とならなければなりません。主を尋ね求める花嫁にこそ、神はご自身の秘密を明かされるからです。

2015.6.28